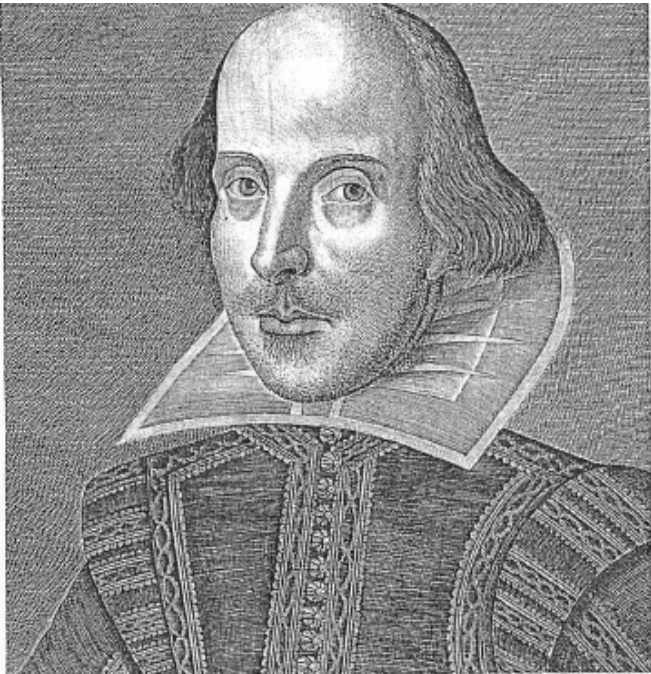


関西連合同窓会特別講演

「漱石とシェイクスピア」

平成28年12月3日(土)於:太閤園



熊本大学文学部文学科
准教授 松岡浩史

講演の内容

I 英国留学と英文学の呪縛

(明治33年9月～明治35年12月)

II 帝大でのシェイクスピア評釈

(明治36年4月～明治40年3月)

III 『草枕』と『ハムレット』

漱石・シェイクスピア関連略年表

明治19年頃（東京大学予備門予科生時代）

- ・中村是公に『ハムレット』を貰うが、「些とも分らなかった」。

明治29年頃（第五高等学校講師時代）

- ・課外授業として『ハムレット』、『オセロー』を講義。

明治33年（英国留学時代）

- ・『十二夜』をはじめ、芝居見物に出かける。
- ・シェイクスピア研究者クレイグ教授の個人指導を受ける。

明治36年（東京帝国大学講師時代）

- ・講義でシェイクスピア評釈を行う。

明治37年 小松武治訳『沙翁物語集』の序に「子羊物語に題す十句」を寄稿。

明治39年 本郷座で坪内逍遙の『ハムレット』観劇し、酷評。

明治42年 帝国劇場で再び逍遙の『ハムレット』観劇し、酷評。

子羊物語に題す十句

- 雨ともならず唯風の吹き募る
『リア王』
- 見るからに涼しき島に住むからに
『テンペスト』
- 骸骨を叩いて見たる董かな
『ハムレット』
- 罪もうれし二人にかゝかる朧月
『ロミオとジュリエット』
- 小夜時雨眠るなかれと鐘を撞く
『マクベス』
- 伏す萩の風情にそれと覺りてよ
『十二夜』
- 白菊にしばし逡巡らう缺かな
『オセロー』
- 女郎花を男郎花とや思ひけん
『ヴェニス商人』
- 人形の独りと動く日永かな
『冬物語』
- 世を忍ぶ男姿や花吹雪
『お気に召すまま』



Charles Lamb
(1775-1834)

I 英国留学と英文学の呪縛 (明治33年9月～35年12月)

- 当時余は特に洋行の希望を抱かず。
- 余の命令せられたる研究の題目は英語にして英文学にあらず。
- **倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり**。余は英国紳士の間において狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり。倫敦の人口は五百万と聞く。五百万粒の油のなかに、一滴の水となって辛うじて露命を繋げるは余が当時の状態なりといふ事を断言して憚らず。

『文学論』序

漱石の英語力

会話は自国の言語故むろん鯨立しても及ばぬなり。しかしいわゆる **cockney** は上品な言語にあらず。かつ分らぬなり。倫敦に来てこれが分れば結構なり。
「日記」明治34年1月12日

僕は英語研究のため留学を命ぜられたようなものの **二年間おったって到底話すことなどは満足にできないよ。第一先方の言う事が確と分からない** からな。情けない有様さ。殊に当地の中流以下の言語はHの音を抜かして鼻にかかるような実に曖昧な嫌な語だ。これは御承知の **cockney** で教育ある人は使わない事になっているが実に聴きにくい。仕方ないからいい加減な挨拶をして御茶を濁しているがね、その実少々心細い。

「書簡」明治34年2月9日付

Cockneyの英語

【コックニー】

ロンドンの労働者階級で話される英語

The rain in Spain mainly stays
in the plain.

スペインの雨は主に平原に降る。



マイ・フェア・レディ(1964)

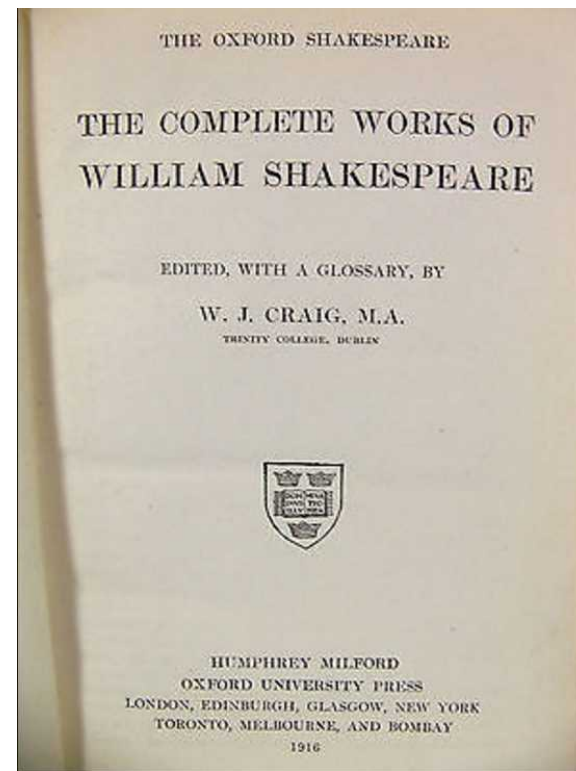
William James Craig(1843-1906)

Craigに会す。Shakespeare学者なり。1時間5 shillingにて約束す。面白き爺なり。

「日記」 明治33年11月22日（水）

先生はアーデン、シエキスピヤの出版者である。よくあの字が活版に変形する資格があると思ふ。先生は、それでも平気に序文をかいたり、ノートを附けたりして済している。のみならず。此の序文を見ろと云つてハムレットへ附けた緒言を読まされた事がある。其の次行つて面白かつたと云ふと、君日本へ歸つたら是非此の本を紹介して呉れと依頼された。アーデン、シエクスピアのハムレットは自分が帰朝後大学で講義をする時に非常な利益を受けた書物である。

「クレイグ先生」 『永日小品』



池田菊苗(1864-1936)

- 夜十二時過まで池田氏と話す。
「日記」[明治34年5月6日(月)]
- 夜、池田氏と英文学の話をなす。
同氏は頗る多読の人なり。[5月9日(木)]
- 池田氏と世界観の話、禅学の話などす。
氏より哲学上の話を聞く。[5月15日(水)]
- 夜、池田と話す。理想美人のdescriptionあり。兩人とも頗る精しき説明をなして兩人現在の妻とこの理想美人を比較するにほとんど比較すべからざるほど遠かれり。大笑なり。 [5月20日(月)]



留学中に段々文学がいやになった。西洋の詩などのあるものをよむと全く感じない。それを無理にうれしがるのはなんだかありもしない翅を生やして飛んでいる人のような、金がないのにあるような顔して歩いて居る人のような気がしてならなかった。ところへ池田菊苗君が独逸から来て、自分の下宿に留った。池田君は理学者だけれども話して見ると偉い哲学者であったには驚ろいた。大分議論をやって大分やられたことを今に記憶している。倫敦で池田君に逢ったのは自分には大変な利益であった。お蔭で幽霊の様な文学をやめて、もっと組織だっただっしりした研究をやろうと思い始めた。

「処女作追憶談」

寺田寅彦(1878-1935)に宛てた手紙

学問をやるならコスモポリタンのものだけに限り候。
英文学なんかは縁の下の力持ち、日本へ帰っても
英吉利におってもあたまの上がる瀬は無之候。小
生のようなちょっと生意気になりたがるものの見
せしめにはよき修行に候。君なんかは大に専門の
物理学でしっかりやり給え。本日の新聞でProf.
RückerのBritish AssociationでやったAtomic
Theoryに関する演説を詠んだ。大に面白い。僕も
何か科学がやりたくなった。この手紙がつく時分
には君もこの演説を読だろ。

[明治34年9月12日付]



寺田寅彦
1917年(39歳)

II 帝大でのシェイクスピア評釈 (明治36年4月～明治40年3月)

今日から夏目先生の『ハムレット』評釈が始まった。先生は此の策は沙翁の四大悲劇の中で特に哲学的なものだと考え得るから、今迄、評釈した『マクベス』や『リア王』とは全く異なった観察態度でこれを眺め度いと話された。私は夏目先生の最も得意の点は『ハムレット』の講義に一番明らかに現れるのではなかろうかと推定した。それだけ私は大きな期待を『ハムレット』にかけてゐる。

金子健二『人間漱石』

評釈例①

ハムレット 儉約、儉約だ、ホレイシヨウ。冷めた葬式用の料理が結婚披露のテーブルを飾ったんだ。

あんな光景を見せられるなら天国で仇敵に会うほうがまだ、ホレイシヨウ。

父上は一父上の姿が見えるようだー

ホレイシヨウ 殿下、どこに？

ハムレット 心の目にだ、ホレイシヨウ。

ホレイシヨウ 一度お目にかかったことがあります。立派な国王でした。

ハムレット 男の中の男、何から何まで完璧だ。

あれほどの人物には二度と会えまい。

ホレイシヨウ 殿下、ゆうべお見かけしたような気がします。

『ハムレット』（第1幕第2場）松岡和子訳

評釈例①

幽霊ノ話ヲ出ス処少々マツシ、余ナラバH.ノ「余父ヲ見ル様ニ思フ」ト云フノヲHo.ガ聞イテ薄気味悪キ思ヲナシアタリヲ見廻ストHガ不審ヲ起シテ之ヲ詰問スルトHo.ガ実ハカクトト云フ風ニカク積リナリ

「蔵書への書き込み (642)」

評釈例②

ホレイショー おおい、おおい、殿下！

ハムレット おおい、おおい、こっちだ！鳥さんこっちだ(Come bird, come)！

…

亡霊[奈落から] 誓え。

ハムレット

ほほう、小僧(Ah, ha, boy!)、貴様もそう言うのか？そこにいたか、相棒。

どうした、地下から声が聞こえたろう。

頼む、誓ってくれ。 (第1幕第5場)

…

ハムレット いいぞ、モグラ先生 (Well said, old mole!)。地下でも素早く動けるんだな？

大した抗夫だ！さあ、もう一度場所がえだ！

『ハムレット』 (第1幕第5場)

評釈例②

此句は突飛ナリ其理由如何

(1)故意ニ狂気ヲ装フ始メノ態度カ

(2)カゝル場合ニハカゝル突飛ノ滑稽的輕薄の句が出るモノカ、非常ニ怖シキコトカ驚ロクべき事又は神經ヲ刺激スルトキハ狂気ニナリ得ルトハ事実ト認ムルコトヲ得ベシ。

…

此句モ…突飛ナリ。心理ハ知ラズ。又ハムレットノ意向モ知ラズ但此突飛ナ句は**非常ノ凄味ヲ生ズ**。否生ジ得ルナリ。

「蔵書への書き込み (642)」

漱石と『ハムレット』①

中村が端艇競争のチャンピオンになって勝った時、学校から若干の金を呉れて、その金で書籍を買って、其の書籍へある教授が、これらの記念に贈ると云ふ文句を書き添えたことがある。中村は其の時おれは書物なんか入らないから、何でも貴様の好きなものを買ってやると云った。さうしてアーノルドの論文と沙翁のハムレットを買って呉れた。其の本は未だに持つてゐる。**自分は其の時始めてハムレットというものを読んで見た。些とも分らなかつた。**

「変化」 『永日小品』



中村是公
(1867-1927)

漱石と『ハムレット』②

物には両面がある、両端がある。両端を叩いて黒白の変化を同一物の上に起すところが人間の融通のきくところである。方寸を逆かさまにして見ると寸法となる所に愛嬌がある。天の橋立を股倉から覗いて見るとまた格別な趣が出る。セクスピアも千古万古セクスピアではつまらない。偶には股倉から『ハムレット』を見て、君こりゃ駄目だよ位にいう者がないと、文界も進歩しないだろう。

『吾輩は猫である』（七）

漱石と『ハムレット』③

- ・ 沙翁は女を評して脆きは汝が名なりといった（十二）
- ・ 宇宙は謎である。謎を解くは人々の勝手である。勝手に解いて、勝手に落ち付くものは幸福である。疑えば親さえ謎である。兄弟さえ謎である。妻も子も、かく観ずる自分さえも謎である（三）
- ・ 最後に一つの問題が残る。一生か死か。これが悲劇である。（十九）

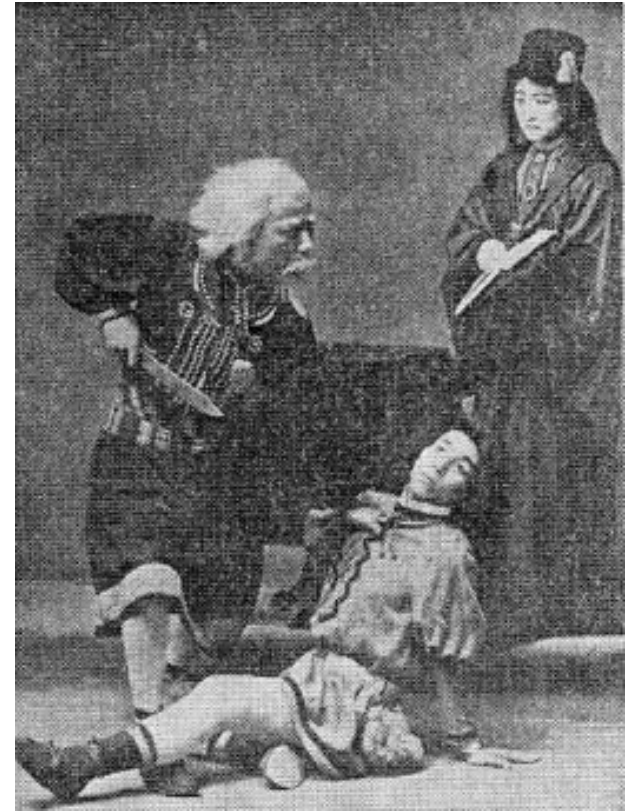
『虞美人草』

漱石と『ハムレット』④

ハムレットはもう少し日本人じみたことをいってくれば好
いと思った。御母さん、それじゃ御父さんにすまないじゃあ
りませんかといういな所で、急にアポロなどを引合に出し
て、呑気に遣ってしまう。 『三四郎』 (十二)

裟翁劇は其劇の根本性質として、日本語の翻訳を許さぬもの
である。其翻訳を敢てするのは、これを敢てすると同時に、
我等日本人を見棄たも同様である。翻訳は差支ないが、翻
訳を演じて、我等日本人に芸術上の満足を与えようとす
らば、葡萄酒を正宗と交換したから甘党でも飲めな
なからうと主張する等しき不条理を犯すことになる。博
士はたゞ忠実なる裟翁の翻訳者として任ずる代わり
断念するか、又は公演を遂行するため、不忠実なる裟
翻譯者となるか、二つのうち一つを選ぶべきであった。

「坪内博士と『ハムレット』」



川上音二郎
(1864-1911)

漱石と『ハムレット』⑤

今に『ハムレット』以上の脚本をかいて天下を驚かせようと思うが、いくら偉いものをかいても天下が驚きそうもないから已めようとも思う。

中川芳太郎宛書簡
[明治38年7月15日付]



Laurence Olivier(1907-1989)

III 『草枕』 と 『ハムレット』

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りにちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。 『草枕』 (一)



前田卓
(1868-1938)

キーワード① 逆説/オクシモロン

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知った。二十五年にして明暗は表裏のごとく、日のあたる所にはきつと影がさすと悟った。三十の今日はこう思っている。
一喜びの深きとき憂いよいよ深く、楽みの大いなるほど苦しみも大きい。

『草枕』 (一)

胸にはいわばくじかれた喜びを抱き、
一方の目には笑みを、もう一方の目には涙を浮かべ、
葬儀には祝福の歌を、婚礼には挽歌をかなで、
歓喜と悲哀を等しく秤に振り分けて妻を迎えたのだ。

『ハムレット』 第1幕第2場

同様ノ事ヲ異様ノ語ニテ重畳シテ用フ沙ノ壇場ノ技ナリ
「蔵書への書き込み (642)」

キーワード②女性像

一花・水・死、そして狂気

御婆さんが云う。「源さん、わたしゃ、お嫁入りのときの姿が、まだ眼前に散らついている。裾模様の振袖に、高島田で、馬に乗って……」

「そうさ、船ではなかった。馬であった。やはりここで休んで行ったな、御叔母さん」

「あい、その桜の下で嬢様の馬がとまったとき、桜の花がほろほろと落ちて、せっかくの島田に斑が出来ました」

余はまた写生帖をあける。この景色は画にもなる、詩にもなる。心のうちに花嫁の姿を浮べて、当時の様を想像して見てしたり顔に、

花の頃を越えてかしこし馬に嫁

と書きつける。不思議な事には衣装も髪も馬も桜もはっきりと目に映じたが、花嫁の顔だけは、どうしても思いつけなかった。しばらくあの顔か、この顔か、と思案しているうちに、ミレーのかいた、オフエリヤの面影が忽然と出て来て、高島田の下へすぽりとはまった。これは駄目だと、せっかくの凶面を早速取り崩す。衣装も髪も馬も桜も一瞬間に心の道具立から奇麗に立ち退いたが、オフエリヤの合掌して水の上を流れて行く姿だけは、朦朧と胸の底に残って、棕櫚箒で煙を払うように、さっぱりしなかった。空に尾を曳く彗星の何となく妙な気になる。『草枕』(二)

長良の乙女が振袖を着て、青馬に乗って、
峠を越すと、いきなり、ささだ男と、ささべ
男が飛び出して両方から引っ張る。女が急に
オフエリヤになって、柳の枝へ上って、河の
中を流れながら、うつくしい声で歌をうたう。
救ってやろうと思って、長い竿を持って、向
島を追懸けて行く。女は苦しい様子もなく、
笑いながら、うたいながら、行末も知らず流
れを下る。余は竿をかついで、おおいおおい
と呼ぶ。

そこで眼が醒めた。

『草枕』 (三)



前田家別邸

John Millaisの *Ophelia* (1852年、テート・ブリテン収蔵)

王妃 柳の木が小川の上に斜めに身を乗り出し
鏡のような流れに銀の葉裏を映しているあたり。
あの娘は、その小枝で奇妙な冠を作っていました。
キンポウゲ、イラクサ、ヒナギク、シランなどを編み込んで。
あの花を、はしたない羊飼いたちは淫らな名で呼び
清らかな乙女たちは「死人の指」と名付けている。
それからあの娘は柳によじ昇り、しだれた枝に花冠を掛けようとした途端
意地の悪い枝が折れて
花冠もあの娘もすすり泣く流れに落ちてしまった。裳裾が大きく広がって
しばらくは人魚のようにたゆたいながら
きれぎれに古い賛美歌を歌っていました。
身の危険など感じてもないのか
水に生まれ水に棲む生き物のよう。
でも、それも束の間、
水を含んで重くなった衣が
可愛そうに、あの娘を川底に引きずり込み
水面に浮かんでいた歌も泥にまみれて死にました。



『ハムレット』第4幕第7場

余は湯槽のふちに仰向の頭を支えて、透き徹る湯のなかの軽き身体を、出来るだけ抵抗力なきあたりへ漂わして見た。ふわり、ふわりと魂がくらげのように浮いている。世の中もこんな気になれば楽なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓張をはずす。どうともせよと、湯泉のなかで、湯泉と同化してしまう。流れるものほど生きるに苦は入らぬ。流れるもののなかに、魂まで流していれば、基督の御弟子となったよりありがたい。なるほどこの調子で考えると、土左衛門は風流である。スウィンバーンの何とか云う詩に、女が水の底で往生して嬉しがっている感じを書いてあったと思う。余が平生から苦にしていた、ミレーのオフエリヤも、こう観察するとだいぶ美しくなる。

『草枕』 (七)



内部風呂場

「あなたはどこへいらしたんです。和尚が聞いて
いましたぜ、また一人散歩かって」

「ええ鏡の池の方を廻って来ました」

「その鏡の池へ、わたしも行きたいんだが……」

「行って御覧なさい」

「画にかくに好い所ですか」

「身を投げるに好い所です」

「身はまだなかなか投げないつもりです」

「私は近々投げるかも知れません」

余りに女としては思い切った冗談だから、余はふ
と顔を上げた。女は存外たしかである。

「私が身を投げて浮いているところを一苦しんで浮い
てるところじゃないんです—やすやすと往生して浮い
ているところを一綺麗な画にかいて下さい」

「え？」

「驚ろいた、驚ろいた、驚ろいたでしょう」

女はすらりと立ち上る。三步にして尽くる部屋の
入口を出るとき、顧みてにこりと笑った。茫然たる
事多時。

『草枕』(九)



鏡ヶ池

私の『草枕』は、この世間普通にいふ小説とは全く反対の意味で書いたのである。唯だ**一種の感じ—美しい感じが読者の頭に残りさえすればよい**。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロットも無ければ、事件の発展もない。

「余が『草枕』」

西洋人は執**濃い**ことがすきだ。華麗なことがすきだ。芝居を觀ても分る。食物を見ても分る。建築及飾粧を見ても分る。夫婦間の接吻や抱き合うのを見ても分る。これが皆文学に返照している故に**洒落超脱**の趣に乏しい。(略)

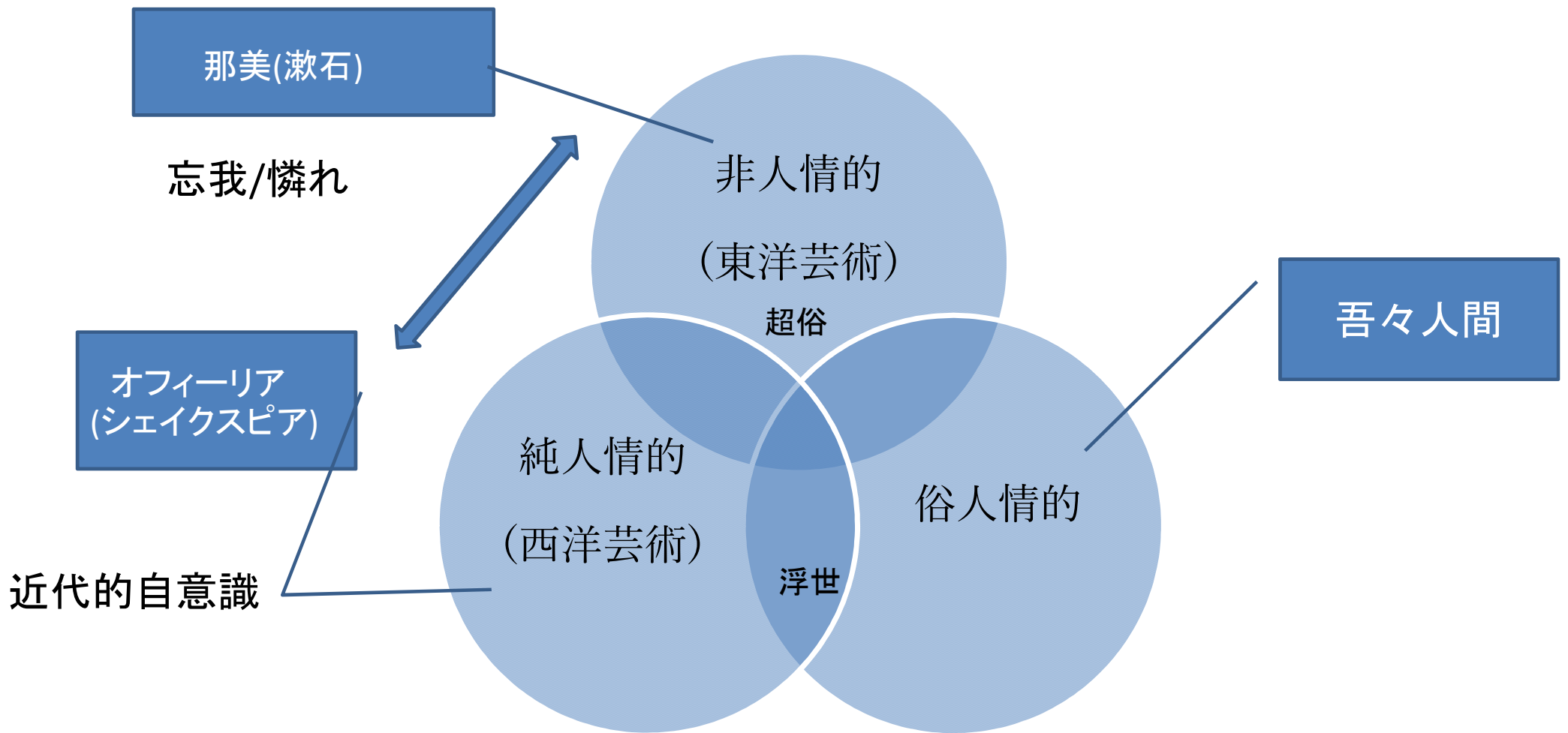
「日記」明治34年3月12日(火)

『草枕』が主張する「感覚的美」とは？

- ・感覚的美は人情を含まない。
 - ・人間の情緒が活動するときに人間は人情を発揮する。
- (a) 全く人情を捨てて見る。松や梅を見るように。= **非人情的**
- (b) 全く人情を捨てきれず、同情や反感を覚えるが、芝居を見る場合のように、利害がなく純粹な同情や反感である場合。= **純人情的**
- (c) 現実世界と同様の同情や反感を起こして人間の活動を見る場合。= **俗人情的**

「画工は非人情的である。沙翁は純人情的である。而して吾々日々パンに汲々として喧嘩をしてくらす人間は俗人情的である。」

森田草平宛書簡（明治39年9月30日）から要約



西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものもこの境を解脱することを知らぬ。『草枕』 (一)

キーワード③ 厭世観 日露戦争と徴兵忌避

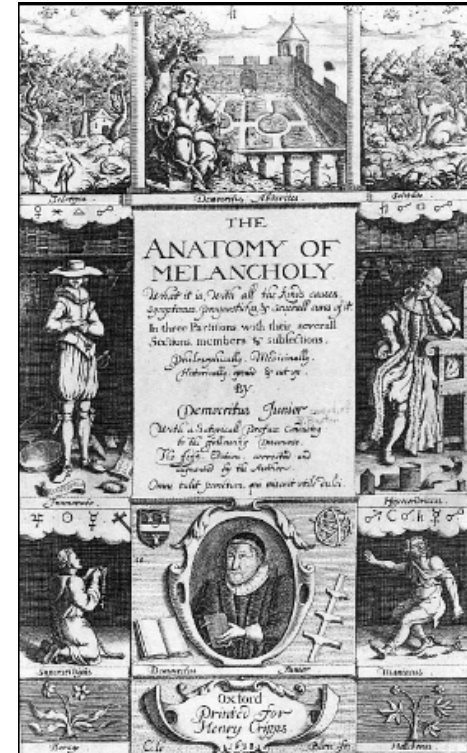
この世のいとなみの一切が
退屈で、陳腐で凡庸で、無駄に思えてならない！
ああ、厭だ厭だ、まるで雑草が伸び放題の
荒れ果てた庭。むかつく下劣なものだけが
わがもの顔にのさばっている。

『ハムレット』第1幕第2場

生きてとどまるか、消えてなくなるか、それが問題だ。
どちらが雄々しい態度だろう、
やみくもな運命の矢弾を心の内でひたすら耐え忍ぶか、
艱難の海に刃を向け
それにとどめを刺すか。

『ハムレット』第3幕第1場

世の中はしつこい、毒々しい、こせこせした、その上ずうずうしい、いやな奴で埋っている。元来何しに世の中へ面を曝しているんだか、解しかねる奴さえいる。しかもそんな面に限って大きいものだ。浮世の風にあたる面積の多いのをもって、さも名誉のごとく心得ている。 『草枕』 (十一)



『憂鬱の解剖』(1621)
ロバート・バートン

Joseph Mallord William Turner(1775-1851)

燦爛たる採光は、炳乎とし昔
から現象世界に実在している。
(中略)

ターナーが汽車を写すまでは
汽車の美を解せず、応挙が幽
霊を描くまでは幽霊の美を知
らずに打ち過ぎるのである。

『草枕』 (三)



雨、蒸気、速度ーグレート・ウェスタン鉄道

1844年

(Rain, Steam and Speed - The Great Western Railway)

近代文明の象徴としての汽車

いよいよ現実世界へ引きずり出された。汽車の見える所を現実世界と云う。汽車程二十世紀の文明を代表するものはあるまい。(略)人は汽車へ乗るといふ。余は積み込まれるといふ。人は汽車で行くといふ。余は運搬されるといふ。(略)文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏みつけようとする。(略)あぶない。あぶない。気を付けねばあぶないと思う。現代の文明はこのあぶないで鼻を衝かれる位充滿している。おさき真闇に盲動する汽車はあぶない標本のひとつである。

『草枕』 (十三)

講演のまとめ

- ① 漱石は、ノン・ネイティブの壁に苦しみながら、文学研究を「科学」に高めようとした。
- ② シェイクスピアを作り手の視点から受容し、モチーフや技巧的な面では積極的に自らの創作に取り入れたのが、表現手段として戯曲を選ぶことはなかった。
- ③ 『草枕』において『ハムレット』のオフィーリアのイメージを那美に投影し、近代的自意識を超越した東洋的美意識を描き、同時に近代文明、商業主義、戦争に警鐘を鳴らした。